

《第 87 回例会》札幌エルプラザ 2019.2.20

## ポーランド名画ビデオ鑑賞会

### 『大理石の男』

当会では元会員の故藤平隆さんから寄贈されたポーランド映画傑作選のビデオテープ全 10 巻の鑑賞会を 2016 年 12 月《第 79 回例会》から順次開催して 4 回目となります。今回の上映作品はアンジェイ・ワイダ監督が 1977 年に制作した『大理石の男』、本傑作選中のワイダ作品では最も新しいものです。

新聞にイベント情報が掲載されなかったため、スタッフだけの参加になるのではないかと不安もありましたが、平日の夜にもかかわらず 20 名を超える方々にご参加いただきました。そのうちおよそ 3 分の 2 が会員以外の方だったのは少々意外で、ポーランド映画ファンの裾野の広さを感じました。

2 時間 42 分という長尺の作品ですが、途中退席される方もなくみなさん最後まで熱心に鑑賞されて

いました。

上映終了後、佐藤晃一さんの司会で懇談会に移り、みなさんに感想を語っ



ていただきました。アンケートから紹介しますと、「あのような時代でも強い女性がいたことに強い共感を覚えた」「何度見ても感興深く見た」「連帯運動前夜の映画だと思った。決して暗くなく希望を感じた」「ロック調の音楽が新しい時代を象徴していた」「最後のテレビ局の廊下を二人が颯爽と歩くシーンが新しい時代を予感させて印象に残った」などの感想がありました。

傑作選からのビデオ上映は今回で 7 作目ですが、アンケートには比較的新しい作品の上映を希望する声もあります。今後、可能な範囲で傑作選以外の作品も含めてポーランド映画をみる機会をつくっていきたいと思っています。(園部真幸)

《第 88 回例会》札幌エルプラザ 2019.3.3 講演会  
尾形芳秀「樺太時代の忘れ物～ポーランドへの誘い」

### 子守唄

幼な子よ ねんねしな  
まぶたつむって ねんねしな

母はどこにもいきません  
ここでおまえと共において  
遠くはなれた父のこと  
祈って 今夜もねんねしな  
安らぎの淵深く どこまでもどこまでも  
おまえと共にどこまでも  
だからお願い 父の名を  
決して呼んではなりません  
父は国を守るため  
この地を離れて行きました  
この闇夜に光射す時がやってくるまで  
私は見捨てられた敷居の上に待ちます  
瀕死の瀬戸際のこの戸口で待ち焦がれ  
尚も夜の帳が私を覆う  
嗚呼、今宵も望み叶わず  
痛む思いは奪い去られる

幼な子よ ねんねしな  
まぶたつむって ねんねしな

(ポメイ詩、熊谷敬子訳)

詩:ポメイ Louis Pomey (1835-1901) Berceuse  
(1848)

原曲:ショパン Fryderyk Franciszek Chopin  
(1810-49) マズルカ第 24 番ハ長調 Op.33-3

編曲:ポーリーヌ・ヴィアルド Pauline Garcia-  
Viardot (1821-1910)

講演を聞いて

ポーランドの旅で撮影された写真などをふんだんに用いた尾形さんの貴重な証言に感謝します。



流刑植民地と強制労働、ホロコーストの強制収容所、市街地に残る無数の弾痕など、当時の権威者たちの行為はどれもこれも醜い蛮行ばかりと思えます。

しかし、その只中にあっても「良きサマリア人」のようなホスピタリティーを無償で示すことができた人たちが私たちの島々にも存在したという情報は、同じくこの島で育まれる者として、思い起こすべき偉大な誇りとなりました。チェフサンマ(別名シンキンチョウ)の物語は私たちの心の宝です。

また、講演の中で、ショパンに縁のある「子守唄」という歌曲を熊谷敬子さんが翻訳しご自身で朗読され、BGMには原曲の A.ルービンシュタインによるピアノ演奏の録音が流されました。ショパン直筆の 17 の歌曲からすると外典にあたる作品ですが、ショパンの良き理解者であった当時の偉大な歌手たちが、彼の死後にマズルカなどの多くのピアノ曲に、

彼の考え方の根幹に敬意を評した上で相応しい歌詞を付けたものの中にも素晴らしい内容の歌曲があり、これらの詩もショパンの「聞こえざる第二のメッセージ」として今日まで多くの歌手によって歌い継がれています。歌詞はフランス語でルイ・ポメイという詩人の詩を引用し、曲はショパンのマズルカからポーリーヌ・ヴィアルドがアレンジしたものです。

このように、当時の混沌の世にあって、今回の対談のように、小さなサロンに集まったアーティストたちが、日頃、決して人目に触れることも、話題にさ

れることもなく、ただ忘れ去られるべき人間の深い悲しみの一面に、しっかりと関心を示していたことを、この曲や、そのほかの詩人たちの残した言葉のアー  
トから見て取れることは、私たちにとっても大きな喜びです。なぜなら、弱い立場にある女性や子供たちに見られるこのような境遇は、今日の平和で豊かな時代にも、そこらじゅうの灰の下に沢山埋もれているであろう、克復し得ない悲しみなのですから。

(松山敏) (POLE95 [2018.9] p.10-11も参照)

写真(左から)松山莞太、國井皇太、尾形芳秀

《第 89 回例会》北海道大学学術交流会館 2019.3.16

## B・ピウスツキ没後 100 年記念

### 講演の集い(2)



日本・ポーランド  
国交樹立 100 周年  
(1919-2019) 記念、  
ブロニスワフ・ピウス  
ツキ没後 100 年記  
念、講演の集い～

ポーランド、サハリン、北海道～の 2 回目である。

講師は井上紘一北海道大学名誉教授で、タイトルは「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事」。没後 100 年と言いつつピウスツキの碑は、第 3 碑が 2017 年にリトアニアに、第 4 碑はポーランドのジョリと、この 30 年に 4 基建てられ、つまり評価は割りと最近になってからのことである。

皇帝暗殺未遂事件に関わり 1887 年基本は死刑であるが、貴族の家系で歎願もあり流刑となった。1896 年に北樺太で減刑となるが移動はできず、その地に留まり土着のギリヤークのフィールドワークなどに従事する。浦塩(ウラヂヴォストク)で 1902 年父が永眠。1902 年に樺太に戻りアイヌ関連の作業に従事、東部アイコタンのバフンケと会い、チュフサンマとアイヌ式の結婚式もあげる。樺太では識字率を高めるように進言をしたりもするが、しかし 1905 年の日露戦争の影響を受け愛妻を置いて欧州へ脱出する。その際に日本へ 7 カ月ほど立ち寄り二葉亭四迷などとの交流があった。欧州に戻るがポーランドは分割され亡国の状態であった。1907 年には幼馴染のマリアと結婚する、しかしマリアには法律上の夫がいたというからややこやしい。1910 年(の日英博覧会だと思いが)平取などからアイヌの方たちが参加し、その聞き取り調査を行ったようだ。1914 年には第一次世界大戦がはじまりウィーンへ。その後ポーランド独立運動に参加するも

1918 年にセーナ川で自死したとされる。

次いで北海道大学大学院の新井藤子氏による「日本で取り組まれてきたブロニスワフ・ピウスツキ研究の系譜」。系譜とは何かということであるが、時間の流れということがある。以前は、チュフサンマは弟の妻として紹介、誤解されていた。弟のユゼフの方がポーランド共和国の建国の父にして初代国家元首として有名だからだ。兄であるブロニスワフの肩書は多く、民族学者、人類学者、言語学者、社会主義活動家、流刑人 etc.で位置付けが不明瞭である。そのなかでブロニスワフといえば蠟管レコードで知られている。その蠟管はポーランドでは古文化財で扱いが難しく、国際プロジェクトとなる。さらに直接触れられないデリケートなもので、再生には音響工学の知識が必要で、レプリカを作成するには歯学の技術も必要、さらに直接針を置かない様にレーザーでの読み込み、雑音を消す技術的サポートもある。結局『ピウスツキ著作集』は 1986 年に刊行を決定するに至る。研究は研究では終わらないものであり、人間にまで戻らないものは意味をなさないだろう。例えば、白老でのアイヌの舞踊もコマーシャル的との批判もありつつ、時代に合わせ変容する自由度がなければ生き残れないものでもあるということだ。(村田譲、空への軌跡・吟遊記 2019/3/24 より)

写真(左から)新井藤子、井上紘一

さっぽろ雪まつり第 46 回国際雪像コンクールに今年もザブジェ市から Team Snow Art Poland(写真左から 芸術家 Piotr Proba、建築家 Marcin Brus、彫刻家

Tomasz Kolega) が参加、作品「お互いを分かり合おう」を製作しました。



大通会場 11 丁目国際広場 2019.2.3 - 7